

構造家・中田捷夫

綺羅星からの継承

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■坪井善勝先生の縁

構造家・中田捷夫さんは大阪の堺で育つ。建築の設計を生業とされていた父上、15歳で町の設計屋さんに丁稚奉公に出たという。親方が亡き後、19歳という若さで店を引き継ぐ。驚くなかれ、構造家の坪井善勝先生の書かれた本を片手に、構造をマスターしたという達人でした。「親父の図面台の横で、鉛筆を研いだり、出来上がったトレベの図面を青焼屋に運んだり」が息子のお手伝い。父上もその子が長じて坪井善勝研究室に入り、書生の如く仕えながら腕を磨くことになろうとは、想像だにできなかったことでしょう。まして、坪井先生が逝かれた後、「中田捷夫研究室」と社名を変えて、現在に至っているとは…。中田父子の人生の、不思議な重なりです。

■ヤマのお酒

ミノル・ヤマサキ邸の居間で、ご本人からお酒をサービスしてもらった人は、多くはいないはず。

坪井先生に、突然「デトロイトへ行く」と言われて同行したのが、世界貿易センタービルの設計者である建築家のミノル・ヤマサキとの出会いです。神慈秀明会の神殿・教祖殿を設計している頃のこと、ひとりで行った時には、自邸にご招待にあずかる。日系人の夫人も一緒に、親しい時間を過ごしたとか。「ヤマから、その時にプレゼントされたのですよ」と開いた作品集は、貴重なサイン入りです。

9.11の時には、構造設計のレスリー・ロバートソンにも直接話を聞いたとおっしゃいます。アーキテクト中田捷夫の人脈は国際的に広いのです。

■I.M.ペイ

ペイが、日本での初めての仕事をなぜ受けたのかという逸話。施主である神慈秀明会の小山美秀子会主が、設計を依頼するためだけに、アメリカに飛んだ。その姿勢に、ペイが心を動かされたからだったといえます。構造設計の担当者となった中田さんは、その会主から建物の相談を受ける程の、信頼を受けることになるのだからこれも凄いこと。

本誌2014年1月号表紙の「MIHO美学院中等教育学校——チャペル」の計画も直接の相談があったという。レスリー・ロバートソンは構造チェッカーとしてかわり、青木繁研究室と共同構造設計をして、RCシェル構造のペイの建物が竣工した。構造が決まるまでの経緯も明確に書かれている。「技術士」と記した名刺を持つ中田捷夫さんの構造論と、人に恵まれた仕事ぶりも、覇志堂は見続けてきた。

■芸術は爆発だ

「母の塔」は川崎市岡本太郎美術館のモニュメント。長い仕事人生で、心に残る作品という。その構造設計を通して、芸術家・岡本太郎のパートナーの岡本敏子さんとも昵懇になる。そして巨大壁画「明日の神話」をメキシコから移送するお手伝いをするにもなった。メンバーと再生プロジェクトを立ち上げ、メキシコへも同行したという。渋谷駅に恒久展示されるまでのハードな活動は、推して知るべし。敏子さんの強い思いが引っ張ったとしても、相当エネルギーなセンセイの力も不可欠だったことでしょう。私たちにインパクトを与え続ける壁画を、是非ごらん下さい。

■日本構造家倶楽部

松井源吾賞を引き継ぐ形で、受賞者が中心になり始めた日本構造家倶楽部。「構造家の地位向上に資する活動」も10年が経過した。事務局の所在は中田捷夫研究室。事務局長、副会長のひとりとしても、「専門家が専門家を評価することは大事と思って」続けている。ここでも、縁とか出会いとかを超えて、自身にしかできない大役をこなされている構造家なのです。

